

英語部会 研究の構想

令和2年度～

I 研究主題

コミュニケーション能力を養うにはどのように指導したらよいか。
—聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して—

II 主題設定の趣旨

学習指導要領では、「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」の育成を目標としている。このためには、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」それぞれに関わる外国語特有の資質・能力を育成する必要がある、その際に「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせることが重要である。「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、社会や世界、他者との関わりの中で、様々な事象、外国語やその背景にある文化等を捉え、情報を整理しながら考えを形成し、再構築することと考えられる。また、「外国語を使って何ができるようになるか」という観点から、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の五つの領域別の学習到達目標も設定されている。

これまで、各校においては、基礎的・基本的な知識及び技能の習得を図るとともに、言語活動を充実させ、コミュニケーション能力の一層の育成を目指す指導を継続してきた。今後さらに、具体的な課題等を設定し、生徒が「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせながら、五つの領域を総合的に育成する言語活動の充実を目指したい。そのためには、中学校3年間で育てたい力を明確にし、知識及び技能を実際のコミュニケーションにおいて活用する言語活動の工夫について研究を深め、生徒が主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につなげたい。

また、小・中・高の円滑な接続を意識した指導計画の作成、各学年の五つの領域別の学習到達目標の具体的な設定等、指導計画の在り方や指導と評価の一体化の工夫、学力調査等における分析結果の活用等についても、研究を引き続き進める。

小学校で育まれたコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の上に、「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た情報・表現を自らの考えや気持ち等と結び付けながら活用し、「話すこと」や「書くこと」で発信できるよう指導を充実させるなど、領域統合型の言語活動を授業に取り入れ、高等学校やその後の生涯にわたる外国語学習の基礎を培いたい。

英語

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

- ・外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力を育成するために、3年間の見通しをもった系統的な指導計画の下、生徒が主体的に取り組める言語活動の在り方、指導に生かす評価の工夫等について研究と実践を行う。
- ・研究主題と研究内容（P）、授業研究と研究発表（D）、学力調査等（S）のトライアングルの関係を意識し、外国語を用いてコミュニケーションを図る活動の質の向上を目指す。

2 研究内容

(1) 指導計画の工夫

小・中・高の学びの連続性を意識し、小学校での学習内容を踏まえた中学校各学年の五つの領域別の学習到達目標を定めて、指導計画を作成する。特に、小学校との円滑な接続に一層留意する。

(2) 言語活動の工夫

コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を明確に設定し、生徒が日常的・社会的な話題について自分の考えや気持ち等を互いに伝え合うことができるように指導する。

(3) 指導方法の工夫

生徒の学習意欲を喚起するような活動や指導方法を工夫する。

(4) 指導と評価の一体化

学力調査におけるS-P表等を利用した分析結果を活用する。また、目標に準拠した適切な評価方法を工夫し、指導の改善に生かす。

英語部会 令和7年度研究計画

I 研究主題

コミュニケーション能力を養うにはどのように指導したらよいか。
—聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して—

II 主題について

学習指導要領において、コミュニケーションを図る資質・能力とは、「理解する」「表現する」「伝え合う」という3つの力を指す。「理解する」「表現する」という単方向のコミュニケーションだけでなく、「伝え合う」という双方向のコミュニケーションも重視されている。これまで聞くこと、読むこと、話すこと、書くことを総合的に育成するための言語活動に重点を置きながら、基礎的・基本的な知識及び技能の習得を図るとともに、実際の言語の使用場面でのメッセージの授受を通じた思考力・判断力・表現力等の育成について指導と評価の方法や指導過程の研究を進めてきた。

各地区の研究大会等の成果により、身近な題材の活用、単元で身に付けさせたい力を踏まえた学習課題の設定と指導過程や学習形態の工夫、目的に応じたICT機器の効果的な活用等が生徒の学習意欲を高め、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことを総合的に育成するために効果的であることが解明された。

令和6年度学力調査及び令和5年度全国学力・学習状況調査の結果から、「聞くこと」において小・中の学びの接続を踏まえた音声の指導に成果がみられた。一方、「読むこと」と「書くこと」においては、文章の概要や要点を捉えることや、既習の言語材料の中から適切な表現を選択し、話題についての考えとその理由を書くことに課題があることが明らかになった。

以上のことを踏まえ、今年度も、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る資質・能力を育成するための指導の工夫について研究を深める。3年間で身に付けさせたい力、すなわち「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から、コミュニケーションの目的や場面、状況等を明確に設定した活動を行う。その中で、日常的な話題や社会的な話題について、学んだ知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けさせたい。特に、昨年度の課題を踏まえ、一定の分量の文章から概要や要点、必要な情報等を読み取ることや、聞いたり読んだりしたことについて自分の考えや感じたことをその理由等を交えて書いたり話したりすることができる技能を身に付けるための指導の充実を図りたい。

また、小学校における指導の内容や実態を把握し、目標や学習内容の系統性、指導方法の継続性等を考慮するなど、小・中・高の学びの連続性を意識して、年間指導計画等の作成に努めたい。教師自らが学び続け、自身の英語力や授業力を向上させるとともに、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行い、主題の解明に取り組んでいきたい。

III 研究内容とその視点

1 指導計画の工夫

- (1) 「CAN-DOリスト」の形で設定した五つの領域別の学習到達目標を活用し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を明確にした言語活動を、生徒の実態に合わせて計画的・継続的に行う。その際、学習到達目標を具体化した単元の目標を設定し、達成状況を把握しながら、指導と評価の一体化へとつなげる。
- (2) 小・中・高の学びの連続性を意識する。小学校で育成されたコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を基に、高等学校卒業時において求められる資質・能力を明確にした上で、各学校における生徒の発達の段階と実情を踏まえて指導計画を立てる。特に、小学校との円滑な接続に留意する。

2 言語活動の工夫

- (1) 生徒が既習の言語材料を言語活動の中で繰り返し活用し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得できるように留意する。
- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を明確に設定し、実際のコミュニケーションにおいて理解したり、表現し伝え合ったりする力を身に付けられるようにする。
- (3) 実践的なコミュニケーション能力を育むために、実際の場面で思考・判断し、即興で伝え合う活動を継続的に行う。
- (4) 互いの考えや気持ちを英語で伝え合おうとする意欲につながるよう、家庭での生活、学校での学習や活動、地域の行事等の日常的な話題や現代的な課題等に触れた社会的な話題と関連付けた言語活動を取り入れる。
- (5) 「聞くこと」「読むこと」を通して得た内容について、生徒が自らの考えや気持ち等と結び付けながら思考・判断し、「話すこと」「書くこと」を通して意見や感想等を発信できるようにする。

3 指導方法の工夫

- (1) 英語による言語活動を行うことを授業の中心とし、生徒が授業の中で英語に触れたり英語でコミュニケーションを行ったりする機会を充実させる。その際に、ペアワークやグループワークといった学習形態を取り入れ、生徒が協働的に学習できるようにする。
- (2) 小学校で扱った語句や表現等の学習内容を繰り返し扱い、定着を図るようにする。また、語彙等の言語材料は、言語の使用場面や言語の働きの点から活用頻度や活用のしやすさに配慮し、言語活動を通して受容的な使用から発信的な使用へと広がるよう段階的に指導する。
- (3) 各単元において、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を明確に設定し、どのような言語活動を行うかを示すことで、身に付けさせたい力を明らかにし、生徒が見通しをもって、主体的に学習に取り組めるように指導過程を工夫する。
- (4) 生徒一人一人の英語学習への意欲を高め、理解が深まるように、課題提示、モデル演示、発問、板書、終末のまとめ、振り返り等を効果的に行う。
- (5) 一人一人の教育的ニーズに応じたきめ細かな指導ができるように、学習用端末等のICT機器を効果的に活用する。
- (6) ALTや地域人材等の外国語が堪能なネイティブ・スピーカー等を効果的に活用し、文化交流や多様な価値観を共有する場を設定する。

4 指導と評価の一体化

- (1) 「CAN-DOリスト」の形で設定した学習到達目標に基づき、各単元の目標及び評価規準を設定し、「指導と評価の計画」を作成する。生徒の学習状況は記録に残す場面を精選し、学習の過程における形成的な評価を行い、指導方法の改善に生かす。
- (2) ねらいを明確にした授業の構想を基に、学習課題を具体的に示し、学習の成果を終末に確認する授業を展開する。
- (3) ペーパーテストによる評価に加え、面接、スピーチ、レポート等のパフォーマンステストを取り入れるなど、五つの領域を総合的に評価するための方法を工夫する。また、生徒が目標をもって主体的に学習に取り組めるように、評価方法や評価規準、評価基準を事前に示す。
- (4) S-P表等を活用して学力調査等の結果を分析し、生徒のつまづきや全体の傾向を把握して、指導の改善に生かす。

IV 研究方法

- 1 研究主題の趣旨に沿って、各学校・郡市・地区で、研究授業や研究発表を中心に研究を進める。
- 2 部会や専門研修会等で、研究に関する情報交換に努め、相互に啓発し合い指導の改善に生かす。
- 3 学力調査等の分析結果を活用し、指導と評価の一体化を図り、指導計画や指導方法を見直す。
- 4 研究のまとめを作成し、共有した研究の成果と課題を踏まえて次年度へと継続研究していく。